The International Association for Integration, Dignity, and Economic Advancement

IDEAジャパン　ニュースレター

ハンセン病患者・快復者や、すべての人々の尊厳の確立を目指して

2013年　2月10日発行　15号

1月31日、曽我野一美さんの追悼集会が開かれた＝東京都千代田区永田町の星陵会館

年頭に当たって

理事長　　森元美代治

新年に入って日本列島は厳しい寒気に見舞われ、各地に大雪や強風、高潮などによる被害が起きていますが、会員のみなさま、支援者のみなさまにはいかがお過ごしでしょうか、お見舞い申し上げます。今冬は例年にも増してノロウィルスによる集団食中毒やインフルエンザの流行も懸念されております。みなさまにはくれぐれも手洗いやうがいを励行してご健康に過ごされますようお願いします。

また、間もなく3年目に入る東日本大震災・福島原発事故の被災地のみなさまには、今年こそ、希望が持てる明るい年になってほしい、と心より念願いたします。

さて、IDEAジャパンも早や9年目を迎えました。みなさまのあたたかいご支援によって、インド、ネパール、フィリピン、中国、インドネシアのハンセン病の子供たちへの奨学金やコロニー(ハンセン病快復村)の生活改善資金等を助成することができました。IDEAジャパンの活動が確実に成果を上げ、現地のユーザーたちにたいへん喜ばれていることをお知らせし、みなさまに感謝申し上げたいと思います。

その一方、国内は非常に厳しい現状であるとお知らせしなければなりません。現在の療養所入所者数はわずか2,000余人になり、そのうち認知症の人たちが22%を占めています。入所者の後遺症の特徴として，知覚麻痺という、致命的な後遺症があります。唇の知覚がなくなり、舌や咽頭がしびれ、ふつうに食べようとしても気管に食べ物が入ってしまう、誤嚥性肺炎の例が世間とは比較にならないほど多いのです。また介護を頼もうとしても人手不足なので、自分で動こうとして転倒し、骨折する例が目立って増えています。

昨年11月5日の市民集会で「療養所の生存権の確立」を訴えましたが、国が適切に対処しないので、高齢の入所者たちがハンストも辞さないとの決意表明をしました。この問題解決が今年の最重要課題となっています。

本年も国内外の問題解決に向けて、さらなる活動を充実させていきたいと願っています。今後共、何卒よろしくお願い申し上げます。

曽我野一美さんのご逝去を悼む

理事長　　森元美代治

われわれハンセン病患者運動の中心的存在であった曽我野一美さんが、昨年 11 月 23 日、誤嚥性肺炎のため高松市内の病院で急逝されました。享年 85 でした。25 日、大島青松園で執り行われた告別式には IDEA ジャパンの花輪を添えて、常日頃懇意にしていた理事の八重樫夫妻が参列してくれました。2004 年８月､IDEA ジャパンが NPO としてスタートするとき、ハンセン病国賠裁判の全国原告団代表を務めた曽我野さんが快く推薦人を引き受けてくださいましたので、曽我野さんの後ろ盾によって、IDEA ジャパンはこれまで活動を続けてこられたと感謝しております。

曽我野さんは、海軍飛行予科練習生時代に 18 歳でハンセン病を発症し、戦後間もなく国立大島青松園に入所を余儀なくされました。青松園は 1909 年、高松港より船で 20 分ほどの孤島に設立された終生隔離の象徴的な療養所です。度量の大きさと卓越した頭脳をお持ちの曽我野さんは入所者に請われて自治会役員となり、1953 年のらい予防法制定反対闘争のときに副会長に就任。以後 18 期も会長としての重責を担っております。

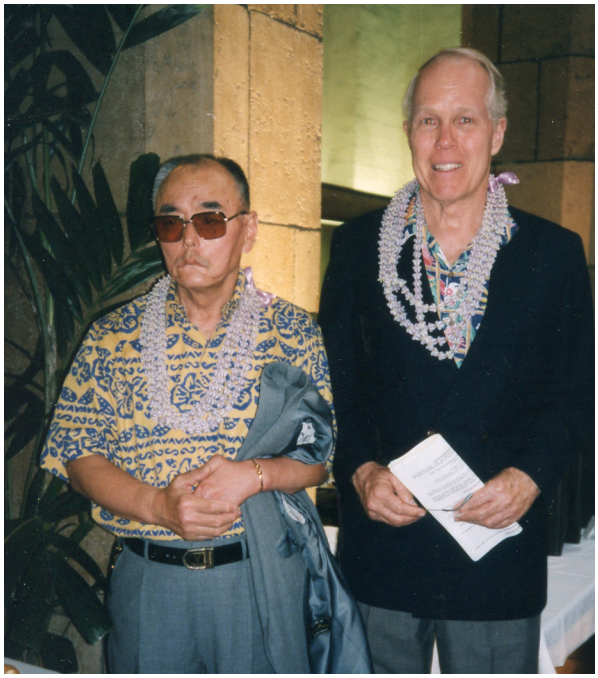
1983 年から 2006 年までの間に二度、全患協 (全国ハンセン病患者協議会、現在の全療協) 会長として『飛ぶ鳥を落とす』勢いで組織の発展に努め、患者運動の見本とまで言われるようになったのです。曽我野会長の下、私は多磨支部長として、また、らい予防法対策委員の一人として働かせていただきました。全患協が 1991 年に国に対し、予防法改正要請書を提出したのが契機となり、“ 侍になるか、乞食になるか ” という曽我野会長の一言により、極めて消極的だった厚生省や所長連盟 (全国ハンセン病療養所所長会)、また反対していた多くの入所者を動かし、1996 年、一気にらい予防法廃止に漕ぎつけたのです。

ハンセン病問題を世に問い、広く知られるようになったのは、1998 年 7 月に星塚敬愛園（鹿児島）と菊池恵楓園（熊本）の入所者 13 名が原告となって、熊本地裁に提訴した「らい予防法違憲国家賠償請求訴訟」(ハンセン病裁判) でした。療養所を震撼させるほどの大事件でしたが、入所者の間でこの 13 名の原告たちは不良患者と揶揄され、当初は負ける裁判として原告も増えませんでした。ところが曽我野さんが青松園の入所者 60 名を引き連れて原告になった時点から、本格的な裁判闘争に発展していったのです。全国原告団代表に選ばれた曽我野さんは、裁判という厄介な表舞台の真ん中に立ち、その活躍は衆目を集めました。そして、被告国を控訴断念に追い込み、わが国裁判史上、前例のない２年半という短期間に第一審である熊本地裁の判決が確定したのです。同判決は、国の隔離政策により原告たちが「人生被害」を被ったことを厳しく断罪し、国に賠償責任を求めました。

全面勝訴判決を得て、退所者給与金制度や恒久的な療養権の保障等を国に認めさせ、特に療養所の将来構想に関して、医療、看護、介護を充実し、最後の一人まで看取るという約束を文書で交わしています。

しかし、われわれが求めていたこれらの約束事は絵に描いた餅になりつつあり、入所者減に伴う医師不足や看護師、介護員削減は多重障害の療養生活者にとって深刻な問題になっています。人手不足のため誤嚥性肺炎が療養者の死因の一つになっている現状を打開しようと、82 歳を超える高齢者集団がハンストも辞さない闘いに挑んでいるさ中、曽我野さんが誤嚥性肺炎で急逝されたことは、誰よりもご本人が無念であったに違いありません。

曽我野さんの死を無駄にしてはならず、全療協、原告団、弁護団、支援者が連帯してこの問題に取り組んでいかなければなりません。曽我野さんの偉大な足跡はハンセン病の歴史に燦然と輝き、われわれの心に永遠に生き続けることでしょう。曽我野さんの御霊の平安をお祈りします。



IDEA 国際集会「生きる―尊厳の確立展」で。1998 年、ホノルル

世界のIDEAからのメッセージ

曽我野さん、あなたのことを忘れません

Dr.P.Kゴパール（IDEA共同代表、IDEAインド）

曽我野さんのご逝去を知って、とても悲しいです。１０年ほど前、曽我野さんは南インドのエロードにある我家に来てくださったことがあります。そのとき、彼はハンセン病コロニーを訪ねました。最初に訪ねたコロニーで人々の生活状態を見て、彼はショックを受けました。彼は生活改善するよう求めました。彼はIDEAインドを通じて、ハンセン病の医療を支援してくれました。

私は2010年に、曽我野さんが暮らしていた大島青松園に行ったことがあります。船から降りると、曽我野さんと奥さんが迎えに来ていました。曽我野さんはとても素晴らしく、強い人でした。彼はその療養所を案内してくれました。園長も一緒に彼と昼食を共にしました。彼はとても友好的な人でした。私は一生、彼を忘れることはないでしょう。

彼の魂が平穏のうちに休めますよう、私と家族は心からお祈りいたします。どうぞ曽我野さんの奥様に、この気持ちをお伝えください。

・S. K. ジュン (IDEA共同代表、IDEEA韓国)

曽我野さんご逝去のニュースを知って、悲嘆にくれています。彼の奮闘の人生を、私たちは忘れることはありません。

彼は逝ってしまいました。けれど、彼の地球上の人々への情熱と愛は、永遠に記憶に残るでしょう。

IDEA韓国の会員は、彼を失ったご家族とIDEAジャパンの皆様に、心からの哀悼の気持ちを表明いたします。

・アンウェイ・ロー（IDEA国際コーディネーター）

彼の悲しいニュースを聞いて、とても残念です。

皆様方は、彼と一緒にいたとき、彼がいかに賢明で、いかに強い人であるか感じていたことでしょう。

IDEAセンター（NY州）では、他の人と同じように、彼の写真を毎日見られるようにしてあります。

いまこの時、私たちは皆様方と共にいます。

・パメラ・パラピアノ（写真家、IDEA アメリカ）

曽我野さんを失ったことはとても残念です。

曽我野さんの人生以上に意味ある人生を想像することはできません。

曽我野さんは、回復者の皆さんに手を差し伸べること を決して躊躇しませんでした。

彼が話すとき、彼自身と回復者への激励、愛、誇りを込めていたので、あなた方はいつも微笑んでいました。

彼は真の意味で代弁者でした。私は彼の広い心を懐かしく思い出します。

・タカ・ハラダ（カラウパパ家族の会、ハワイ）

曽我野さんの思い出について、私の考えと祈りを申し上げたいと思います。

私は彼に会ったことはありません。しかし、スティグマ(汚名)と社会からの隔離に苦しむ人々の側に立って話す人は、尊敬されるべきです。

私の兄、ポール・タダシ・ハラダは、家族から引き離されましたけれど、彼は家族の励ましになりました。

曽我野さんが世界のハンセン病回復者の側に立って無私で働いた仕事は、これからも生き続けるでしょう。

彼を個人的に知っている皆様方が、彼を失った悲しみを深く表明していることで、私は彼のことを知ることができました。

・ポーリーン・ヘス（カラウパパ家族の会、ハワイ）

曽我野さんのこんなに早いご逝去を知ってとても残念です。彼が世界をより良い場所にするように貢献したことによって、人々は尊厳と尊敬をもって生きられるようになりました。彼が自由への門を開けたので、ハンセン病回復者は、公の場で敬意をもって生きられるようになりました。私は家族も同様に自由を感じられるようにと祈っています。

私は曽我野さんを存じ上げませんが、でも、彼が目的意識と栄誉ある人生を送ったことは知っています。私の心と祈りは彼の家族と共にあります。

IDEA ジャパンのバザーに、同志社女子高生 40 人が参加した。昨年で 13 年目になる／ 12 年 11 月 3 日、多磨全生園

京都の孫たち＜同志社女子高校生＞の感想文

全生園のバザーと園内見学で学んだこと

奥田　彩夏

バザーのお手伝いをして、ハンセン病に対する見方が変わったように思います。後遺症があるため、試着とか、お金の受け渡しのとき、うまく体を動かせない入所者の方がおられました。自分なりに少しずつでも力になれるようにやっていけばいいのだと思うことができました。

また森元先生が直接ハンセン病の歴史を伝えてくださったので、自分の頭でしっかり考えることができました。福祉や政治などの様々な社会的立場から、二度と差別が起きないように務める義務があると思います。過去は変えられませんが、１人でも多くの快復者の方々に希望を与えられるようになりたいと、心から思いました。

宮本　真優

IDEA ジャパンのお店に来てくださった方の中に、後遺症のある方がいらっしゃったので、近くまで商品を持っていったりして、工夫しました。園内では、入所者同士が楽しそうに会話したり助け合っている様子が見えて、差別されてきた時代の苦しみを乗り越えておられるように感じました。

命を奪われた胎児をまつる「尊厳回復の碑」とか、納骨堂をお参りして、間違った認識がこのような悲しい過去につながってしまったのだと感じました。

朝比奈　由衣

自分の知識がほんの少ししかなかったと感じました。入所者の方が明るく生活しておられたのが印象深かったです。お店に来られた入所者のご夫婦が冗談混じりに話してくださったので、心が温まりました。森元先生のお話は、授業より衝撃を受けました。人なのに人として扱われなかった事実があったとは、平和な日本で暮らしている自分には実感できません。このような人権侵害の過ちを侵すことのないよう、未来の人々に伝えていくべきだと思いました。

長谷川　千恵

行く前は、後遺症を持った方々と接することができるか不安でしたが、実際に会ってみたら、普通でした。みんな可愛らしくて、明るかったのが印象的でした。高齢のお客さんでしたが、明るい色合いや、可愛らしいデザインの服に人気があったように思えます。いちばん印象に残ったのは、納骨堂です。最近では故郷の実家のお墓に入れてもらえるようになったということでした。資料館の展示では、世間から隔離され、過酷な状況下であるにもかかわらず、入所者が必死に生きていたことを感じました。当時の日本による過ちを忘れることなく、反省し、世の中に伝えていくことが大切です。

西垣　佳捺

授業で、ハンセン病の患者さんは隔離され、心の拠り所である家族も離れていってしまったこと、日本と

いう国全体が事実を隠したことなどを知って、大きな衝撃を受けました。ところが、実際に全生園に行ってみて、いちばん印象に残ったのは、つらい体験をした皆さんの笑顔でした。生きながら地獄を味わった方たちが死を選ばず、むしろ強く生きたいという思いに満ちているように見えました。１人でも自分を理解してくれる人がそばにいることが、希望にあふれた姿になるのだと思いました。

林　里穂

中学の頃からハンセン病について調べてきたつもりでしたが、私にとって関係のない問題だと思い込んでいました。資料館に行って患者さんの生活や苦悩がにじみ出ている写真を見て、困難な状況に置かれても希望を失わずに“生きる”ということを大切にする患者さんたちの姿に心を動かされ、勇気をもらいました。

バザーでは、“共に歩む”ということを実践できたと思います。実際に入所者の皆さんと触れ合って、楽しい時間を共有できて、本当にうれしかったです。この訪問で“隣人愛“というものの原点に立ち返ることができました。

小亀　恵里加

バザーに参加するまで、私は少し不安でした。でも実際にバザーが始まると、夢中でした。皆さんは、掘り出し物が多い洋服のコーナーでとくに楽しんでいらっしゃいました。車椅子に乗った方が「長袖がほしい」とか、「明るい色がほしい」とおっしゃるので、その条件に合う服を探しているうちに、不安が消えて、自然と笑顔になっていました。

ビックリしたエピソードがあります。ある方が取り出した人形はまるで片足がないように見えました。「私も片足がないの。だから、この子と一緒」と言うので、私はドキッとして何と答えていいのかわかりませんでした。でも「気に入った」と言って買ってくれました。片足がないことを自分のチャームポイントであるように、笑顔で。入所者の方たちはすべてを受け入れて、現状をより楽しく明るく過ごしていらっしゃいました。貴重な人生の財産となるような経験をありがとうございました。

長谷　安珠

なんとも言えない不思議な気持ちで全生園を訪ねると、豊かな自然が広がっていたことに驚きました。園内はたくさんの人がいて、活気にあふれていました。バザーで、私の祖母ぐらいの年齢の方たちと一緒に洋服を見るのは楽しく新鮮でした。

森元先生の案内で納骨堂に行ったとき、「納骨堂こそ差別の象徴ではないか」というお話は、とても考えさせられました。資料館は元々入所者の有志が作ったのだというお話を聞いて、皆さんの思いの強さを感じました。

とくに印象に残っているのは、舌読、陶芸、囲碁などの娯楽に関することです。私たちより困難であるのに、私たちよりもはるかにそれを楽しんでいる姿に衝撃を受けました。私は自分に与えられた機会をもっと生かすべきだと強く感じました。

藤原　千尋

皆さんは昔つらい思いをしてこられたのに、挨拶をしたら笑顔を返してくれました。森元先生が「この人は歌が上手で、もし病気にならなかったなら、歌手になっていたかもしれない」と言われたので、日本政府は「人の夢まで奪っていたのだ」と気づかされました。

園内見学で望郷の丘、納骨堂、小さな石碑（尊厳回復の碑）を見て、あらためて日本政府の過ちを感じました。また幼い子どもたちも親から引き離されて収容されていたと知って、辛くなりました。家族との絆、人生の選択肢、入所前の生活、社会との共生が取り戻せるような社会に変わることを願っています。

米山　真由

私の想像していた場所、環境、人々とは全く違い、素敵な所でした。行く前は、自分がどういう感情を持つのか、怖かったです。でも、園内の方々は笑顔にあふれていて、たくさん声をかけていただきました。バザーでは、皆さんが楽しく買物をしている姿が印象的でした。

森元先生は明るい方で、私たちを「京都の孫」と言ってくださいました。その笑顔にたどり着くまで、とてもつらい思いをされてきたのだと思います。全生園では、子どもたちと園の方々が楽しくお話をしている姿を見掛けましたが、地域に溶け込んでいるように思いました。こういう環境で子どもたちが育つのは、未来につながる良いことだと思います。私は今回の体験を話すことで、少しずつでもハンセン病の理解の輪を広めていきたいです。

菊池事件「確証なき処刑」について

副理事長　柴田　良平

現在、菊池事件の再審請求のための署名運動が広がっています。菊池事件が起きたのは 1951 年 6 月 1 日で、その時期は第 2 次「無らい県運動」が進められていました。その年の 11 月、3 人の国立療養所長は国会証言で、はかどらない患者収容を、強権でできるように法律の改定を求めました。この証言の中で、菊池事件の起こった熊本の所長は、「病気を県に報告されたことを逆恨みして一家謀殺を企て、村の衛生主任の家にダイナマイトを投げ込んだのです（議事録から）」と、審理中の菊池事件について、F 氏を犯人と決めつける予断発言をしていました。その後、この衛生主任は、何者かによって刃物で惨殺されましたが、この事件も F 氏の犯行にされ、死刑判決となったのです。

事件が起きた当時、ハンセン病に対する世間の目は冷たく、患者を出した家へは、親戚も遠ざかり、家族も患者を隠し、ときには家族でないようにふるまうのが当たり前の状態でした。そのため、F 氏の無実を示す数々のアリバイがありながら、それを立証する者はいませんでした。彼に早く世の中から消えてもらいたい、身内であることを忘れたい、これが身内の偽らない心情であったと思われます。このことは、ハンセン病の宣告（病気の診断を、私たちはそう呼んだ。死刑宣告と同義語）を受けた者が、経験してきたことです。

そうした心情は F 氏もわかっていたはずで、半ばあきらめと自虐的な状態に加え、逮捕されたときに受けた腕の貫通銃創の傷の発熱で、警官から差し出された用紙に捺印し、押し返しました。まさかこの捺印が、強要された自白調書を承認し、死刑となる決定的証拠とされるとは、予想しなかったと思います。

そしてこの菊池事件は、一度も公の裁判所で審理されることはなく、療養所郊外の医療刑務所の仮設の法廷で、半ば非公開で行われました。正規の法廷で裁判を受けられたのは、らい予防法違憲国家賠償請求訴訟（国賠訴訟）が初めてで、らい予防法は患者が裁判を受ける権利をも阻害していたのです。

処刑は F 氏が最高裁に審理手続き中の 1962 年 9 月 1 日午後 1 時 7 分、福岡刑務所で執行されました。この報が瀬戸内の長島愛生園に伝えられたのは、その日の夕刻でした。園内放送を聞いて集会所に駆け付けた療友たちは、無力でなすすべを持たずに、涙を流していました。

あの日から 40 数年の時が流れ、国賠訴訟は勝利し、国の予防政策の非道が明白にされました。しかし、ハンセン病に対する偏見と差別に阻まれ、充分な審理が尽くされず、国の予防政策が深く絡むこの F 事件は未解決のままです。一人でも多くの市民の皆様と共に力を合わせ、ぜひ再審請求を実現させ、F 氏と家族の名誉回復が叶うよう念願しています。どうぞ署名活動にご協力をお願いいたします。

（注）この記事は、柴田良平さんが執筆し、IDEA レター第 2 号に掲載したものを加筆・修正しました。ニュースレターでは、えん罪で死刑判決を受けた F 氏の名前を出していますが、ご家族の意向もあって、固有名詞を使わないことになりました。現在、事件名は「菊池事件」と改められて、再審請求の運動が進められています。同封した署名用紙にご記入し、ご協力をお願いします。

昨年末から入院中だった柴田さんを、お正月明けに病室を訪ね、以前、ニュースレターに柴田さんの書かれた菊池事件について、最新号に掲載したい旨、お訊ねすると、「ありがとう！　ありがとう！」と繰り返して、笑顔で応えて握手してくださいました。ところがその後、病状が急変し、1 月 24 日、肺炎でお亡くなりになりました。

柴田さんは、プロミンで治癒し、社会復帰したベティー・マーチンの『カービルの奇蹟』を読んで社会復帰を目指し、ご夫婦で実現しました。

2002 年にセネカフォールズ（NY 州、アメリカ）で開催された国際女性会議にすい子夫人と一緒に初参加し、以来 IDEA の集会には積極的に参加されました。「IDEA の仲間と知り合えたことで、自分の後半生が豊かに変わった」と、いつも感謝しておられたことを思い出します。各国 IDEA の友人たちから追悼のメッセージが届いています。皆さんとともに、心からご冥福をお祈りいたします。（村上・記）

世界の仲間たちと。第1回国際ハンセン病女性会議。2002年6月。セネカフォールズNY州、アメリカ。前列中央が柴田良平さん

＜寄　稿＞

良平さん

S・ショウジ

84年8ヶ月、精いっぱいの歩み、失望もあったでしょう。理不尽を感じた事もあったでしょう。生き甲斐を失いかけた事もあったでしょう。閉じ込められ、納骨堂まで用意された世界から脱出し、自ら手にした一社会人としての生活、生きている喜びをより強く感じた事もあったと思いました。

良平さんと出会ったのは、中期高齢者中の約10年前、ご夫妻が原告として闘ったハンセン病国賠訴訟が結審し、ぼつぼつ体のケアに入りかけた頃でした。

長野県小布施町の病院に通い続けた数年間、私もハンセン病後遺症手術のため入院しましたが、良平さんの奥さん、すい子さんの入院手術も再々度と数年続き、その度に入院、面会、退院と往復500キロを車での日帰り日程で、中期から後期高齢の体に負担は大きかったはず。でも疲れを表した事はありません。おいしい食事処を探し、食べる楽しみも見つけた事もあります。

ハンセン病首都圏市民の会の会合は二人三脚。自宅に迎えに行き、テーブルは隣に着席する。発言は良平さん。会合が終わると自宅に送る。私たちは頭と足、二人で一人前だと思っていました。日常生活も話してくれました。近隣に住む知り合いの方々が、家事のサポートをしてくれたよと。

入院生活も一段落。夫婦2組4人で2年続けて伊豆半島へ。真鶴、熱海のホテルから海を見ながらの食事。海の幸、精進料理、幸せの時間を共有している事を実感しました。

良平さんは、兎眼からくる眼の炎症のため、診察や手術入院。東京本郷にある東大病院にも通い続けました。年齢からくる難聴も進み、診察室に夫婦2人で入る。私は待合室で待つ。朝出掛けの車中では元気なく、診察を終えた帰りの車中では晴れ晴れとして話を聞く事もあった。角膜移植手術数回、視力を失う心配もあったでしょう。明るく前向きな姿勢、いっしょに居る相手側を気づかう人でした。

自室にも私たち夫婦でお邪魔しました。富士山の見えるマンション最上階の暖かいお部屋。時にはパソコン教室風、食事会を兼ねた雑談会、部屋いっぱい賑やかに声が跳び回っていました。

私は良平さん夫婦は私たちの見本だからと、何度も言いました。退所者同士の結婚、後遺症ありの子どもはいない。年齢は一回り以上先輩であり、老後の生き方を将来の指針にと思っていたからです。身内との係わりに距離を置き、隣近所とも浅い付き合いです。

良平さんは外国へもたびたび出かけ、国内外とも交流の輪を広げ、日頃の活動も積極的、的確な判断、細やかな気配り、私とは正反対でしたが、理想の姿でした。出会いから10年、身近に濃い時間を持てた事に感謝です。

＊トピックス＊

昨年 12 月、慶応大学と大阪大学の学会で研究発表するため来日したシギュール・サンドモさん（ベルゲン市立ハンセン病博物館館長、IDEA ノルウェー）の歓迎ランチ会／2012.12.18

＊お知らせ＊ぜひご参加ください！

講演会＆コンサート　4月6日（土）　13：30〜15：30
多磨全生園コミュニティーセンター（公会堂）　入場無料
講演会：アンウェイ・ロー（IDEA 国際コーディネーター）
コンサート：沢知恵　（シンガーソングライター）

昨年 9 月、山内きみ江さん（理事）の写真展が国立ハンセン病資料館で開催されたときに、写真集も出版されましたので、ご紹介します。

『生きるって、楽しくて』

ハンセン病を生きた山内定・きみ江夫妻の愛情物語

撮影・文　片野田　斉
定価　　1500 円（税別）
株式会社　クラッセ刊
TEL 042-310-1552

会費納入のお願い

立春の候、皆様にはいよいよご壮健のことと拝察申し上げます。いつも IDEA ジャパンの活動にご理解・ご支援を賜り、感謝申し上げます。

前号で会計報告しましたように、現在会費収入が減少していて、活動を続けるには、寄付金に頼らざるを得ません。まことに恐縮でございますが、今年度分の会費が未納の方は、会費を振り込んでくださいますよう、お願い申し上げます。今後ともご支援のほど、よろしくお願いいたします。

理事長　　森元　美代治

発行責任者　：森元　美代治
特定非営利活動法人 IDEA ジャパン
http://www.idea-jp.org/
事務局：
〒 204-0012　東京都清瀬市中清戸 4-847
中清戸 4 丁目アパート 7-605
Tel&Fax 0424-93-6105

編集後記：村上　絢子

IDEA ジャパンとかかわりの深い方たちの訃報が相次いで、寂しさがつのります。曽我野一美さんは世界の快復者に生きる希望と自信を与え、社会復帰を果たした柴田良平理事は常に叡智ある話をされ、女性会議に参加した S 子さんは、快復者の親として子どもを育てる苦悩を訴えました。どの方の人生も決して忘れることは出来ません。ご冥福をお祈りします。

E-mail　info@idea-jp.org
FAX　04-2925-8165